

研究課題

読む力を育てる国語科指導のあり方

副題

～読みを交流させるメディアの活用～

学校名	燕市立燕南小学校
所在地	〒959-1233 新潟県燕市殿島1丁目4番21号
学級数	9
児童・生徒数	221名
職員数/会員数	19名
学校長	小川 章
研究代表者	小川 章
ホームページ アドレス	http://www.tsubame-city.ed.jp/tsubamemin-e



1. はじめに

当校では、「読む力を育てる国語科指導のあり方～読みを交流させるメディアの活用～」という研究主題で、1年間、研究に取り組んできた。研究の経過及び成果と課題について以下に報告する。

2. 研究の目的

文章の内容を正しく理解する力は、すべての学習において基礎となる力であることから、当校ではその力を読みの力ととらえ、文章の読みの力を高める指導の在り方について平成19年度から研究を続けている。これまでの研究により、児童に読みの技能を身に付けさせることで、ある程度の読みの力の向上は見られた。さらに、児童は、自分の読み（理解した内容・解釈）ができた児童は、「自分の読みが本当に正しいのか」、「友だちの読みを聞きたい」という思いをもち始めている。

このことから、読みの観点などを活用しながら、自分の読みをより正しくしていくとともに、自分の読みを人に説明したり友だちの読みを理解したりして交流し合う中で、自分自身の読みをより深めていくことがこれからの課題であると考え。そのためには、互いに伝え合う力が必要不可欠である。しかし、それが児童に十分に身に付いているとは言い難い。

そこで、伝え合う力の不足を補い、読みの交流を生み出すために、情報機器、特に実物投影機を活用していくこととした。児童が読んで理解した内容が書かれたノートやワークシートを大きく投影することで、それらを友だちに伝えやすく

なる。さらに口頭のみでは伝わりにくいことが目に見える形で提示されることでより理解しやすくなり、意見の交流が効果的にしかも効率よくできるものとする。その交流により、文章がより正しく理解できるようになると考える。また、パソコンを活用することにより、読みの交流において出された意見を保存し、次の交流に繋げることができ、児童の意識の持続が図られると考える。そこで、上記の研究主題を掲げ研究を開始した。

3. 研究の内容と方法

右の3点について、読みの力の向上に効果を上げるためのあり方を明らかにする。そのために校内授業研究で事前指導案検討及び事後協議会を通して、分析検討改善を行う。

- | |
|-----------------|
| ①読みの観点（かぎ）の提示 |
| ②読む力を身に付けさせる手だて |
| ③メディアを活用した読みの交流 |

4. 研究の経過

以下のように授業研究・検討会を行った。

年月日	学年	教材名	備考
22.6.17	3	ミラクルミルク	
22.6.29	4	あめんぼはにん者か	
22.7.9	2-1	スイミー	
22.9.16	1-2	はじめは「や」!	外部講師招聘

22.10.18	5	父ちゃんの凧	燕中学校区計画訪問 ※参加者約50人 外部講師招聘
	1-1	まめ	
22.11.18	6	山へ行く牛	
22.12.13	2-2	あいさつのみぶりとことば	初任研を兼ねる 外部講師招聘
23.3.4	1-2	ろくべえ まってろよ	

5. 成果

読みの力は向上したととらえている。その根拠は、国語単元テスト（「読み」）が以下のように上昇しているからである。

8学級中	5学級が、年度当初から平均90点以上を維持
	1学級が、1学期平均86.5点から3学期平均94.1点に向上
	1学級が、1学期平均79.7点から3学期平均86.1点に向上

(1) 読みの観点について

当校では、読む力を向上させるために、読みの力の向上に必要な技能を「観点・かぎ」として児童に提示し、それらを身に付けられるような授業展開を工夫してきた。

これらの観点を示すことにより、児童は見通しをもって学習を進めることができ、読み方の技能を使った読み方を授業の中で実際に行うことができる。そのため、児童は読みの技能を獲得し読みの力が向上したと考えられる。

① 説明文の「観点・かぎ」

①一字下がっているところに番号を付ける	→ 形式段落の確認
②問いかけの文を見付ける	} → 文章全体の題材 (文章構成にもかかわり)
③問いかけの答を探す	
④順序を表す言葉・つなぐ言葉を見付ける	
⑤キーワードを見付ける	→ 段落の要点
⑥大事なこと（要点）をまとめる	
⑦つなぐ言葉を探す	} → 意味段落の要点 文章構成
⑧文の組み立てを考える	
⑨筆者の伝えたいことを考える	
※低学年では、写真や挿絵を対応させて読むこと・順序をとらえること	
※中学年では、意味段落の要点をとらえること	
※高学年では、筆者の論の展開の工夫を読むこと	

② 物語文の「観点・かぎ」

①誰が出てくるか（登場人物・主人公）
②あらすじをとらえる
③どこにいるのか（場所）
④どんなことをしたのか（行動）
⑤どんな気持ちなのか（気持ち・心情・その変化）
※低学年は挿絵を手がかりにして読む
※中学年は情景描写を読む
※高学年は作者の伝えたい主題を考える

③ 読みの「観点・かぎ」のまとめ

以上のような「観点・かぎ」を、説明文でも物語文でも学年の発達段階や教材文の特性によって適宜適合させながら提示し指導することを積み重ねていけば、読む力は向上する。

(2) 読む技能を身に付けさせる手だて

—— 説明文 ——

- ア 自分が知っていることと結びつけて読む
- イ 順序を表す言葉を手がかりに文を並べ替える
- ウ キーワードにサイドラインを引く
- エ まとめの文を作る
- オ 意味段落に分ける
- カ 文章の組み立てを考える
- キ 形式段落の要点を考える

—— 物語文 ——

- ア 挿絵を取り入れたワークシートの使用
- イ 行動や気持ちが分かる叙述にサイドラインを引く
- ウ 気持ちを吹き出しに書く活動

以上のような手だてを用いると児童の読みの力の向上に有効に働く。そこで、重要なことは、児童一人一人に自分の考えをしっかりとめさせることである。そのためには、時間を十分に与え、明確な発問・指示によって課題をしっかりと理解させ、必要な補助発問や助言を用意しておく必要がある。それを可能にするには、十分な教材研究と発問の吟味である。

(3) 読みの交流について

メディアを活用した読みの交流についての効果的な点と研究過程において改善した点を以下に述べる。

① 効果的な点

ア 文章中にサイドラインを引く活動

教材文を提示し、言葉の種類ごと、例えば、誰の行動か、したこと・考えたことなどにマーカーペンで色付けし、見やすく提示することにより、注目すべき言葉や叙述が明らかになり、交流の対象が分かりやすくなる。

イ 要点をまとめる活動

児童が書いた要点文をそのまま投影できるので、見て分かりやすい。字数を限定した要点文を検討する場合には、特に有効である。

ウ 文章構成図を比較検討する活動

児童が自分の考えなどを書いたノートやワークシートを投影できるので、言葉で説明するだけでは理解しにくい段落と段落とのつながりなどが分かりやすくなる。

エ 発表する活動全般

発表に対して意欲的でなかった児童が発表に意欲的になる姿が見られた。それは、書いてあるものを提示しながら説明すると、説明しやすくなるので自分でもできそうだと感じたからであろう。また、聞く側にとっては、ワークシートに書

き込まれている理由なども同時に投影されるので、音声での発表に含まれていない内容も視覚情報として得られるので、それによって理解が助けられている。

② 改善した点

ア ワークシートの形・大きさ

交流の場面では、児童が自分の考えをワークシートなどを投影しながら発表する。その後複数の児童が同様に繰り返すのであるが、前の児童の発表内容がスクリーンには残っていないので話し合いの材料になりにくかった。そこでスクリーン上に複数のワークシートが一度に投影できるようにワークシートの形や大きさを検討し、スクリーン内で交流ができるようにした。

イ 黒板の併用

メディアを使って発表し、その後の話し合いのために、スクリーンと黒板の位置関係を見直し黒板を広く使えるようにした。児童の意見発表はスクリーンを使い、黒板に児童の意見のポイントを集約しておくことができるようにした。（話し合いの観点や目的の整理が必要）

ウ 2つのスクリーンの使用

物語文のある場面で主人公の心情が大きく変化する場面の前後を左右2つのスクリーンに投影し、前後の叙述を比較しサイドラインを書き込んでいく。そして、2つのスクリーンの中央にある黒板に主人公の心情の変化をまとめていく。

エ コンピュータの活用

前述した、児童の発表内容が残らないという点を改善するためにコンピュータを活用した。コンピュータと電子黒板アプリケーションと実物投影機を用いて行った。コンピュータ

内に保存した画像ファイル（ワークシートや交流した内容）を適宜再表示することにより、前時の意見や交流の内容が確認できるようになり、本時の交流の材料となった。

6. 課題

(1) 読みの観点について

新しい教科書教材に適合した読みの観点について検討していく必要がある。しかし、基本的には、成果として得られた「観点」を基に検討し設けることができると思われる。これから課題となるのは、今後この指導を積み重ねていくことである。そのために国語科年間指計画に入れるなどして、きちんと積み重ねられる体制を整えることが重要である。

(2) 読みの力を身に付けさせる手だてについて

手だてはある程度明確になっているが、それを支えるものは教材研究に他ならない。新教科書の教材文について教材研究を十分に行い、教材文に適した学習課題、発問、その教材で身に付けさせるべき読みの力、そのための手だてを明らかにし、いつでも参照できるようにしておくことが課題である。

(3) メディアを活用した読みの交流について

職員が機器の扱いに慣れ、どのような場面でどのように使うか分かってきた。これまで述べてきたように、改善してきた点も多数ある。これからもメディアの長所をうまく活用し、短所を補う方策を検討することが必要である。